

余市町大崎山遺跡第一次調査概要



大崎山遺跡調査団

昭和40年9月

余市町大崎山遺跡第一次調査概要

調 査 者	大崎山遺跡調査団	團 長 高 倉 新 一 郎
調査主催団体	北海道教育委員会	
	北海道文化財保護協会	(会 長 広瀬経一)
	余市町教育委員会	(教育長 佐藤利雄)
	余市町文化財専門委員会	(委員長 今 善作)
	余市町郷土研究会	(委員長 今 善作)
	毎日新聞北海道支社	(報道部長鈴木二郎)
調査担当者	北海道文化財専門委員	副団長 大 場 利 夫
調査分担者	函館市遺愛高等学校教諭	千 代 肇
調査参加者	函会図書館東洋文庫	渡 辺 兼 庸
	余市高等学校教諭	久 保 武 夫
	北海道大学理学部	大 島 和 雄
	余市町教育委員会	額 毛 友 義
	"	水 門 博 英
	"	工 藤 義 三
	"	内 田 良 夫
	北海道大学学生	菊 池 俊 彦
調査協力者	余市町豊丘青年会 (会長 川田輝男)	30名
	余市町道立余市高等学校生徒	10名
調査特別参加者	北海道大学文学部	本 田 実 信
	北海道史編集室	永 田 富 智
調査地点	北海道余市郡余市町沢町 飛林富吉氏所有地 (通称大崎山)	
調査期日	昭和40年9月1日 - 9月6日	

調査の経過

大崎山は余市町市街地の西南方約2軒の地点に存在し、標高凡そ124米である。

本山の山頂及び東南に面した緩斜面に石造の遺構が認められる。

本遺構は昭和31年5月余市町役場沢田義夫によつて発見されたが、同37年4月余市町郷土研究会長今著作、余市町役場沢口清らによつて、先住民の遺構であることが確認された。

昭和38年5月今著作の案内で、北海道文化財専門委員高倉新一郎、大場利夫らが相ついで予備的調査を行った。その結果本遺構は大小無数の自然石を積み重ねた石塁と石積が主体をなしており、石塁は幅1.5米、高さ1-3米、長さ100米前後のものが数ヶ所に見られた。また石積は長さ5-12米、幅3-5米、高さ1.5-3米で、形態は馬蹄形、長方形、楕円形をなしたものがある。石塁と石積はかなり整然と構築され、積石の手法には一定の制約があるらしく、方向と配列の状態が認められる。しかも石塁と石積とは互に関連性があつて、石塁は恰も石積の外郭をなすかのように構築されていることも認められた。しかしながら構築年代を推定する資料は発見されず、また何の目的のために構築されたものかは明らかにできなかった。

その後同年10月大崎山遺跡調査団が編成され、翌39年再び現地の踏査が行われ、同年5月遺跡の空中撮影が行われた。また7月には東京大学吉藤忠教授を招いて意見を尋ねて、本格的調査の準備を進めた。

調査の概要

大崎山の調査に当つて (1)石塁並びに石積遺構の全般に亘つての測量図の作製 (2)石積遺構の一基についての完全測量と解体調査 (3)石積遺構周辺の発掘調査の三つの目標が立てられ、しかもこれらの作業を同時に行うことが考えられたが、日数と費用の都合で、取敢ず(2)と(3)にあげた項目について調査が傾倒された。結果的には石積遺構の規模が大であつた。その完全測量に終始したため、石積の解体は行わず、それに代つて石積遺構の年代的傍証と遺構構築上の採石の状態を知るために、周辺地帯の発掘調査が行われた。

積石遺構の規模と構造

今回調査を行った積石遺構は、東南に面し、傾斜角約25度の緩傾斜面につくられている。長さは11米、幅4.5米、高さ2米で、形は矩形に近く、東西を軸としている。積石の手法は比較的整然としており、階段状に積みれ、5段をなすが、下から2段目は基本部北側から廻廊様に南側に向つて環らされている。段上は各段とも平面をなしている。積み上げた石塊は、大なるものは長径50㎝、中なるものは20㎝、小なるものは7㎝前後である。積み方は、地山に自然にある大塊の一部をそのまま利用して外郭をつくり、外郭には大なる石を用いて次々に積み上げ、内側には中、小の石を用いている。石塊の石材は附近より採集されたもので、石質は安山岩である。なお外郭の石は現地表面より30-50㎝埋没している。

周辺地帯の状態

積石遺構の南側に、遺構に沿つて、長さ10米、幅2米と長さ10米、幅3米の2ヶ所について表土を剝離して地層の状態を調査した。その結果地層は上層より数えて、才1層は黒色土層で15㎝、才2層は礫を含む黄色粘土層で地山である。地山を露出した状態では10-20㎝の小礫が所々に散在していたが、本山麓の他から見れば、礫の数はきわめてすくなかつた。おそらく積石遺構を構築した際に、ここに散在していた礫の多くは採集されたものと考えられる。

才1層を剝離した際、才2層上には長径1米、短径60㎝の凹所と、直径40㎝、深さ20㎝前後の穴が見られたが、これらには特別の配列が認められず、木造遺構の跡であるか否やについては目下の所明らかでない。

調査の要約

1. 積石遺構の構造を知る第一手段として、遺構1ヶについて実測図を作製した。
2. 実測図によつて見れば、本遺構は東西を軸とした長さ11米、幅(最長)4.5米、高さ2米で、形態は矩形に近く、斜面に沿つて五段に積まれている。
3. 積石の材料は、地山の石を基に、附近から採集した石を用いている。
4. 積石遺構の周辺からは、縄文式土器及び石器が少数出土したが、これをもつて、本遺構を構築した年代となすことは、考慮の余地が多い。
5. 本遺構は、保壘なのか、墳墓なのか、または信仰上の遺構なのか、あるいはその他の目的のために構築されたものなのかについては、今後数回に亘つて調査を重ねなければ明らかにできない。
殊に積石及び石塁を含めた全体の配置を知る測量図の作製が必要である。